

目的意識をもたせ、表現力を育成する教科横断的な単元づくり  
 ～ 他教科等で学んだ内容を地域に発信する国語科の授業実践 ～

山本啓介（教育実践コース）

1 国語科における教科横断的な単元づくりの必要性

(1) 国が目指す社会と学校のかかわり方

「社会に開かれた教育課程」の実現を図るために、「社会との目標の共有」「資質・能力の明確化」「学びを学校に閉じないこと」という3つの側面が重要であるとされている。そこから、地域と学校が今まで以上に連携し、学びが学校を越えた、社会や自分の生活に生かせるという経験を積み重ねていく必要がある。

(2) 自校の地域教育の取組と課題

自校の地域教育コーディネーターが仲介に入った地域連携の取組において、H29・H30年度では、「地域の教育資源を学校教育に活用する取り組み」に比べて、「学校での学びを地域に発信・還元する取り組み」は少なく、主に参観日での発表に終始している。また、地域との連携は下学年に多く、高学年において取り組みが減少している。それに伴い、新潟市生活・学習意識調査の学校と地域の関係性を問う設問において肯定評価の減少が見られる。

(3) 本研究の目的と研究テーマの設定

これまでの自身の実践においても、学びが学校の中に閉じていることについて、課題意識もっていた。

本研究では、これらの国・自校・自身の課題を解決するために、学んだことを地域に発信し、反応を受け取るまでを一連の学習として単元を作成する。その際、単元を構成する上で、学びを地域に発信すること（以下、「表現面」とする）を担う教科を国語科とする。

しかし、発信したいという思いを醸成するためには、児童が目的意識・相手意識をもつ必要がある。そこで、発信する内容を各教科や総合的な学習の時間等の学び（以下、「内容面」とする）から設定し、児童が自ら解決したい課題について十分探究できるようにする。従来、国語科の時間だけでは、言語活動の目的を見出したり、内容を設定したりする上で、課題が見られなかった。内容面と表現面をつなげ、教科横断的な単元

を構成することで、先の課題も解決することができると思う。

このことは、教育課程企画特別部会 論点整理において、「学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」として挙げている『『カリキュラム・マネジメント』の重要性』とつながる。「カリキュラム・マネジメント」は、「教科横断的な視点」「PDCA サイクル」「地域資源の活用」の三つの側面から捉える必要があるとしている。これらを網羅している本研究は、新学習指導要領の理念の実現につながる取組である。

本研究を行うことで、得られた知見を職員に伝えられるようにする。また、地域単元を学年で協働して開発していくことで、上山小学校の職員にも研究に参加してもらう機会を作っていく。このように、上山小学校における地域教育について、学校規模で行える基盤づくりの役目を本研究が担えるようにする。

2 研究単元の実際と考察

本研究では、学んだことを地域に発信し、対象から反応を受け取るまでを一連の学習とした3つの単元を開発した。単元の実際をカリキュラム・マネジメントの視点から述べていく。

(1) 社会科との教科横断的な単元作り

① 教科横断的な視点

4年社会科と4年国語科を組み合わせ、国語科の時間で「新聞で知らせよう、安全で健康なまちづくり」という単元名で授業を行った。

位置付け	教科等	単元名・活動
内容面	4年 社会科	「安全なくらしとまちづくり」「健康なくらしとまちづくり」 体験：社会科見学（中央消防署・亀田清掃センター）
表現面	4年 国語科	「メモの取り方を工夫して聞こう」「みんなで新聞を作ろう」 言語活動：新聞作り GT：新潟日報社 佐藤さん

② 授業の実際と教師の手立て

単元1時間目に、見学先からの依頼を児童に伝え、単元のゴールとなる新聞づくりとその対象を確認した。そして、2時間目に新潟日報社から講師を呼んだ。児童は、新聞記者からの出前授業を通して、新聞を作る流れ（過程）を学んだことで、記事を書くためには取材に行き、

メモを取ることが重要であることを理解した。その結果、単元開始前に行った警察署の社会科見学と比べて、メモの量が大幅に増えた。しかし、新聞にまとめるためには、見学でたくさん書いてきたメモから、書きたいテーマにつながるものを選び、文章化する必要がある。この段階で、児童のつまずきが予想された。そこで、次の手立てを用いて授業を行った。

表現の段階	手立て
書き出す	見学したことをメモする。(メモ用紙)
まとめる	「ピラミッドチャートと赤・青の付箋紙」「モデル文」「構成表」
磨く	下書きしたことを読み返し、赤ペンで訂正する。(下書き用紙)

### ③ 表現力を発揮した児童の姿

見学先でのメモを書く姿、メモから必要な情報を抜き出し、足りない情報を補って下書きを書く姿から、一人一人が学ぶ必要感をもち、自分の考えを積極的に表現する姿が見られた。

成果物より、読み手に呼び掛けるような疑問形で書き出している割合(80%)や、事実と意見が分けて書かれており、特に意見はまとめの後に書かれている割合(100%)、資料を文中に差し込んでいる割合(100%)の高さから、読み手意識や正確に伝えたいという思いが表れていた。新聞は、20の自治会に配付した。

### ④ 成果と課題

児童は新聞作りというゴールへの見通しを認識しており、その時間に何をすべきか想像できる状態にあった。児童が見通しをもって学習できた要素として4点が考えられる。併せて、単元を通じて見えた課題も次に4点挙げる。

成果	①単元のゴールを児童と共有する時間を設けることで、児童の動機付けを高めることができた。
	②新聞記者による出前授業を通して、新聞記事ができるまでの一連の流れを学ぶことができた。
	③出前授業で学んだ「新聞作りの過程」と単元計画を合致させることで、児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。
	④作成した社会科新聞を地域に発信することができた。
課題	①14時間を予定していたが、時数を超過してしまった。
	②社会科(内容面)の学習の高まりを見取ることができなかった。
	③地域に児童の新聞がどのように映ったのか、感想等を得ることができなかった。その結果、地域から返信を受けての児童の反応や変容を調査することができなかった。
	④4学級で取り組むことができず、地域発信も1学級分しかできなかった。

## (2) 総合学習との教科横断的な単元作り

### ① 単元の概要

H30年度前期の成果と課題を受け、後期は3年総合的な学習の時間と3年国語科の教科横断的な学習の単元計画を作成した。

児童が学んだことを地域に発信したいと思うためには、学習や栽培活動、試食を通して女池菜に愛着を持つ自分たちと、地域との間にギャップがあることに気付くことが重要である。そこで、全校の保護者にアンケート調査を行った。その結果、女池菜に対して否定的な意見が多いことを知った児童は、保護者の意識を変えたいと考え、スーパーにはポップの設置を、保護者には参観日に女池菜のプレゼンテーションをすることを企画した。

位置付け	教科等	単元名・活動
内容面	3年 総合的な学習の時間	「おいしい女池菜つくろう」 体験：女池菜栽培 GT：女池菜農家の方・JA女性部
	3年 国語科	「女池菜を紹介しよう」 言語活動：ポップ作り・プレゼンテーション GT：ポップ広告クリエイター

### ② 授業の実際と教師の手立て

発信に向かう際に、女池菜のよさを児童に問うと、6つの要素(味・歴史・特長・育て方・栄養・調理法)が出てきた。児童に一番伝えたい要素を選ばせ、3～4人のグループを編成した。各グループでコアマトリクスに具体的な良さを書かせ、グルーピングした。グルーピングしたよさの中から、ポップで伝えたいよさと伝えたい対象を選択し、ポップを作成する下地を作った。その後は、ゲストティーチャーからの教えを生かし、次の手順で学習を行った。

表現の段階	手立て
書き出す	対象を絞ってたくさんキャッチコピーを作る。(付箋紙) (NHK for school 動画「メディアのめ」)
まとめる	作ったキャッチコピーを吟味し、絞る。(観点の明示と分類) 絞ったキャッチコピーをまとめる。(キーワードの書き出し) (NHK for school 動画「お伝と伝じろう」)
磨く	まとめたキャッチコピーを磨く (国語科詩づくりで児童が使った表現技法の意識化)

ポップ作成後、使用した資料を生かし、保護者に向けたプレゼンテーションをするための、提示資料と原稿づくりを次の手順で行った。

表現の段階	手立て
書き出す	保護者に一番伝えたいことを決め、具体的な内容を2～3つに絞り、ピラミッドチャートに書き出す。
まとめる	保護者に提示する資料を作成し、どのように話せばよいか原稿用紙にまとめる。
磨く	原稿の言葉を磨き、どのように資料を提示するか考える。 (教科書のモデル文とNHK for schoolの映像教材の発表部分)

### ③ 表現力を発揮した児童の姿

ポップ作りでは、表現の段階に沿った指導後に、どのグループも言葉が更新され、短い言葉で尚且つ女池菜のよさが伝わるように工夫されていた。プレゼンテーションでは、児童の総合的な学習の時間での学びや思いを聴き手に

伝えるために、国語科で学習した発表のコツを原稿に生かしていた。聞き手がいるということで、順序を表す言葉や問いかけ、注目の言葉を使うことが全てのグループでできていた。また、なぜそうするのか等の理由をはっきりさせて話しているグループが多く見られた。

#### ④ 成果と課題

成果	①児童が女池菜を追究し、学びを発信するための条件が分かった。 ・目的が共有され、問題を解決したいという意識があること。 ・対象（意味ある他者）が設定されており、伝える場（実際の生活の場）が用意されていること。 ・伝える方法（言語活動）について学ぶ機会があり、児童が作成過程を見通せていること。 ・伝えることの「責任」を児童がもっていること。
	②地域や保護者からの返信があることによる、児童の総合学習の学びと、国語科における言語活動の学びの価値付けが生まれることが分かった。 ③3学年5学級で単元を協働して開発することができた。
課題	①表現面のゲストティーチャーを活用したものの、教師の意図したポップの作成過程よりも、技術的な面の講演が多くなってしまった。
	②表現面のゲストティーチャーが入らなかったプレゼンテーションの学習において、発表内容の精選、資料収集、原稿書き、発表の仕方の工夫等で、手立てを用意できず、児童まかせになった部分もあった。
	③グループ活動における評価の仕方において、グループでどのようにしてキャッチコピーが生まれたのか等、7グループ分の話し合いを聞き取ることができず、単元末アンケートの記述に頼ることとなった。

### (3) 総合学習との教科横断的な単元作り

#### ① 単元の概要

H30 年度後期の成果と課題を受け、H31 年度前期研究単元は、3年総合的な学習の時間を内容面に設定した。単元のゴールとしては、総合的な学習の時間に学んだことをレポートにまとめ、「上山祭り」で発信し、保護者や地域の住民に知ってもらうことを設定した。そのために、3 学年の保護者にアンケート調査を実施した。その結果、他市町村からの転入が多く、小学校や地域の歴史を知らない人が多いことが分かった。そこから、学びを保護者や地域の人に知らせたいという児童の意識が芽生えた。

表現面については、講師を呼ぶことができない場合も想定して、先の2実践とは異なり、今までゲストティーチャーが担っていた役割を教師が担った。

位置付け	教科等	単元名・活動
内容面	3年 総合的な学習の時間	「わたしたちの上山小・上山地域」 GT：自治会長、PTA 副会長
表現面	3年 国語科	「レポートで伝えよう、小学校や地域のこと」 言語活動：レポート

#### ② 授業の実際と教師の手立て

教師が作成したモデル文を活用し、次の手立てでレポート作りを行った。その際、児童に提

示するモデル文は使う言葉や説明する順序を吟味し、質の高いレポートの作成を心掛けた。

表現の段階	手立て
書き出す	対象に伝えたいテーマを決め、その理由と総合学習で学んだ事実を書き出す。
まとめる	総合学習で書いた「調べ学習カード」に書いてある事実を読み直し、テーマにつながる事実を集め、内容を削ったり、まとめたりして下書きを書く。
磨く	挙げている事実の順序を変えたり、使っている言葉を見直したりして文章を仕上げる。（児童同士の読み合い）

#### ③ 表現力を発揮した児童の姿

どの児童も相手意識をもち、丁寧な字でレポートを書いていた。レポートを読んでもらうという意識が児童にあったことがうかがえる。レポートのモデル文があることで、書きぶりを参考にし、自分のレポートに取り入れている児童は、全指導内容で半数以上であった。単元後の振り返りから、「地域に学びを発信した」という自分たちの行動に価値を見出し、「知ってもらえた」「やってよかった」と考えている児童が多かった。この地域発信と地域からの返信という双方向のやり取りが、学校の学びが地域に役立つことや、レポートという表現形式の有効性を認識する上でとても重要であるといえる。

#### ④ 成果と課題

成果	①発信場所や発信対象の新たな開拓ができ、教師や地域住民の学びについても明らかにできた。
	②表現のゲストティーチャーを活用しない場合の単元作りができた。
	③児童が総合的な学習の学びを、国語科のレポートに表現する際、教科を横断することで、児童の学びがどのように文章化されたのか、児童の思考を辿ることができることが分かった。
課題	①言語活動の設定において、総合学習がスタートしている時点でまだ構想段階にあったため、国語科としての資質・能力や目指す子ども像を設定することが遅れた。
	②学年5学級の発信場所の確保が必要である。

### 3 目的意識をもたせ、表現力を育成する教科横断的な単元づくりの価値

(1) カリキュラム・マネジメントの視点から見た本単元の意義

#### ①教科横断的な単元が可能にする「学ぶ内容」と「学ぶ目的」の明確化

実践結果より、教科等における児童の学びが深まることによって、内容の充実や興味・関心、愛着が生まれた。この部分がより高まっていくほど、表現面に対する意欲が変わってくると言える。そして、表現面の手立てである「書き出す」「まとめる」「磨く」ことを通して、表現する場や対象を意識することができ、伝えようと

する相手に合わせた成果物が作られるようになっていくと考えられる。

教科横断的な学習をした際、教科等の内容面では、学びを地域の住民に発信することをゴールとすることで、児童が何のために学ぶのかという目的意識をもつことができた。自分の学びが他者（地域住民）の学びになることから、児童は主体的に学ぶことができ、より正確に情報を得ようとしたり、過去の学びを見直したりすることで深く知ろうとすることが分かった。

国語科における表現面では、発信すべき必要感のある内容と目的意識を、児童がすでにもっている段階から学習をスタートすることができた。よって、地域の人に教科等で学んだ内容を伝えるために、有効な技術を意欲的に学び、自らの成果物に生かそうとする姿が見られた。

他教科等での学びと国語科の教科横断的な学習を組み合わせることで、児童は発信する目的を持ち、成果物にまとめる必要性を感じることができた。そこから、教科等の枠を越え、単元という一連の流れの中で児童の学びを考えていくことが、国語科にとっても書く必然性や書き方を学ぶ必要性が得られることが分かった。すなわち、この単元構成は、学んだことを伝えたいと思い、そのための表現方法を学び、成果物を作成するという児童の意識に沿った学習を進めることができると言える。

#### ②思考の見取りと評価のつながり

児童の成果物や、そこに記された言葉が生まれた背景には、内容面の学びが関係していることが分かった。内容面と表現面の学習において、育成すべき資質・能力を掛け合わせることで、教師は、児童の追究活動から発信するための成果物の作成までの過程を一連の流れとして見取ることができた。よって、国語以外の面からも児童の学びを捉えることが可能となった。児童がなぜそのように書いたのか、どこからその言葉が生まれたのか、教科等の文脈からも児童の思考を知ることができた。そこから、できなかったことについて児童の学びを否定するのではなく、できたこととその背景にある児童の学びをつなげることで、児童を認める評価や声掛けが生まれると考える。

## 4 今後の展望

(1) 「社会に開かれた教育課程」から見る本研究の課題

### ①社会との目標の共有

「社会に開かれた教育課程」の実現には、地域の住民にも目指す児童の姿や目標について意見を聞き、互いのビジョンを共有したり、すり合わせたりしていく必要がある。本研究中で依頼したゲストティーチャーには、教師から単元の概要や目指す子ども像を伝えたものの、共に児童を育てていくという関係にはなっていなかった。また、学びを発信する相手に対しては、ゲストティーチャー以上に打ち合わせる時間が乏しく、依頼に留まった。このことから、本研究では、まだ地域住民との協働までには至っていないと言える。

発信場所や対象を探すことに終始せず、「社会に開かれた教育課程」を実現するために、どのように学校と地域が協働していけるか考えていく必要がある。

### ②資質・能力の明確化

地域と共有した目標を達成するためには、どのような資質・能力を各教科等で設定していくかを明確にする必要がある。

本研究では、筆者が目標と身に付けさせたい資質・能力を仮設定し、学年で話し合う際の資料とした。しかし、話し合いの場では目標よりも、学習内容や活動が話し合いの中心となった。学習内容のみに終始するのではなく、身に付けるべき資質・能力を明確化し、教育課程に位置付けることで、児童の学びや教師の手立ての評価、改善につながると考える。教師が、今求められている資質・能力を話し合い、学校での教育活動にとどまらず、学びを地域に開くことで、地域社会とともに教育活動を進めていく必要がある。

### ③単元計画の更新と地域とのつながり

単元計画を更新していくことは、担任同士が協働した結果生まれた学びを次の年度に引継ぎ、単元の質が上がった状態からスタートできるという利点がある。尚且つ、地域発信を行う場合、発信場所や対象、発信する言語活動の種類や方法も記録されていることは、異学年でも参考にでき、継続した地域との関係づくりや新たな発信場所、対象の開拓にも発展することが考えられる。

また、言語活動についても系統性が生まれたり、下学年で行っていない発信方法を採用したり等、縦のつながりを意識した単元開発を行うことができる。自校においても、単元レベルで適切に記録し、次年度の担任や地域教育コーディネーターに伝達していく必要がある。